

三人目は王羲之(303年～361年)である。東晋時代(317年～420年)の政治家であり書家である。彼は山東省の人であるが、紹興の人と思われるほど紹興に縁のある人である。48歳(351年)の時、会稽郡(現在の紹興市周辺)の長官として赴任してきたから、ここでの生活は亡くなるまでの10年間しかない。であるのに、なぜ紹興と深いつながりができたのかを見てみよう。

彼は山東省の臨沂の名門の出であるが、人格識見とも優れ朝廷の高官から高く評価されていた。しかしながら中央(首都は建康、つまり南京)から要職に任命されてもその都度就任を固辞、断れなくなった彼は地方勤務を求めた。そうして赴任したのが会稽郡であったのである。彼はこの地がとても気に入り、長官は4年間で辞し、以後隠遁生活を送る。どの国でも俺が俺がという人物が多い中で、彼のような人物が中央政界に入っていれば東晋の時代ももう少し長続きしたかもしれないと思いたくなる。

紹興市は、蘇州、杭州と並んで江南を代表するエリアである。長江の南——江蘇省の南部と浙江省一帯は古来より“江南”と呼ばれ、風光明媚で温暖な気候と肥沃な大地で有名である。そして中国の食糧供給基地の役割を果たしてきた。「江浙(江蘇省と浙江省)実れば天下足る」と言われ

ていることでもわかる。江南地方は、河川や網の目のように張り巡らされた運河が走り、そこには石の橋がかかり、水面に映る灰白色の家壁は今でも古き良き時代の中国を彷彿とさせる。この様なところであるから王羲之がこの地を愛したのは至極当然のことであろう。そしてこの地を終焉の地と決めている。

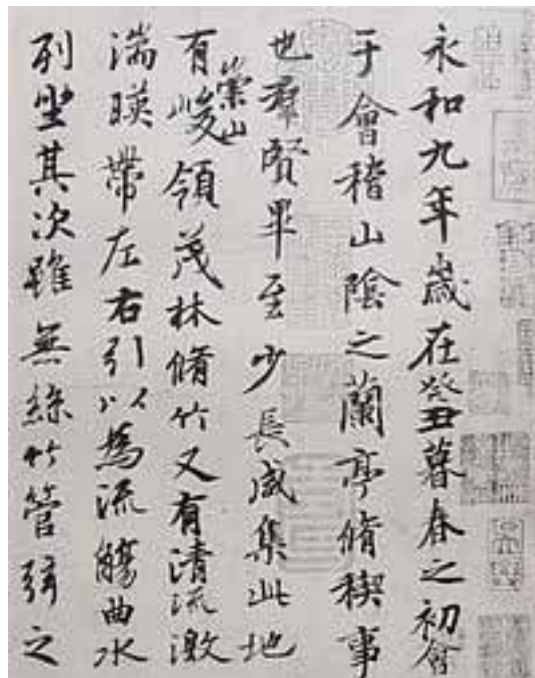
私が紹興市を初めて訪れたのは、2008年の10月である。杭州市へは紹興市に行った翌日なので、この時は秋瑾(4月号をご参照下さい)のことは知らない。逆の日程なら秋瑾のゆかりの場所も見たかもしれないと思うと少し残念である。紹興市に行ったらどうしても見たいと思った所は、「蘭亭」と「魯迅の故居」である。私が懇意にしている旅行社のZ社長は、先ず市内中心部から南西に約13kmのところにある蘭亭に案内してくれた。

蘭亭とは地名であるが、この名の由来は春秋時代の末期、越王勾践がこの地に蘭を植えたところからきているという。素敵な名である。車から降りて竹藪などの植え込みの道をZ社長の後に続きなが

ら歩く。ようやくあの蘭亭に来たのだと感慨を新たにす。しばらく歩くと高さ約2メートルの石碑があり、その奥には池が広がっていた。その碑には半畳くらいの大きさに二文字、「鷺池」と刻まれ



王羲之肖像画



王羲之「蘭亭序」(神龍半印本、部分)書

ていた。ガチョウの池だからガチョウが泳いでいるのだろう、と簡単に考えていたが後日帰国して調べると次のことが分かった。王羲之は幼いころからガチョウが大好きでこの池にガチョウを飼っていたため、鷺池と言われるようになったというのだ。そして石碑の“鷺”の文字は王羲之が、“池”の文字は息子の王献之が書いたものだという。確かに二文字のそれぞれの太さは違い、同一人物が書いたようには見えない。王献之も有名な書家で、羲之と献之を「二王」として敬われている。王羲之の紙に書かれた書の真筆は、幾多の戦乱などで何一つ残っていないとのことであるが、この石碑の文字は石に刻まれているとはいえ、真筆とは言えないのであろうかと思ったりした。

さらに進むと、有名な曲水が見えてきた。「曲水流觴」の宴が開かれていたところだ。“觴”とは「さかずき」のことだ。近くの川から水を引き込み、曲がりくねった流れをつくって上流から盃を流し、それが自分のところに来るまでに詩を詠むというご承知の遊びであるが、曲水を見たとき、意外に小さいなという印象を受けた。ネットでは、1980年の改修時に清代に元々あった場所に再建した、とあったが果たして当時の凶面のようなものに基づき、きちんとした時代考証のうえ造られたのかとすこし疑問を感じた。

今年の初め、上野の国立博物館で王羲之展が開かれていたので見に行った。ちょうど一年前にあった「北京故宮博物院200選」ほどではなかったが、大勢のひとが詰めかけていた。日本人の中国の歴史・文化に対する関心の高さが今回も伺えた。

163点の展示があったが、やはり「蘭亭序」のコーナーは黒山の人だかりであった。そのコーナーにはさまざまな蘭亭序が展示してあった。多くの書家が王羲之の書いた蘭亭序をお手本にしたものが残っているわけだ。それらから真筆を想定するしかないのである。そこの壁には有名な353年、陰暦3月3日の曲水の宴の様子が長尺の白と黒で描かれた絵巻物となって掲げてあった。それを見て当時の曲水流觴のイメージがかなりはっきりと理解できた。この宴の時、王羲之は41名の地元の名士を招待し、小川

の両側に座らせた。説明書きを読むと、招待者のうち王献之を含む16名が盃が流れてくるまでに詩を作り上げられなかったとある。ゆったりとした流れにしても短い時間であろうから仕方なかろうと思うが、できなかったものには罰として大きさは定かではないが3杯の酒をしっかりと飲まされたという。

この曲水の宴はご承知のように日本に伝わり、平安時代の貴族が和歌を詠んだりしたのである。さらに付言すれば王羲之の書は平安時代に三筆(空海、嵯峨天皇、橘逸勢)や三蹟(小野道風、藤原佐理、藤原行成)を生むなど、和様書道に多大な影響を与えている。

さて出来上がった詩をまとめた詩集の序文を書いたのが、世に名高い「蘭亭序」である。全文324文字の序は、王羲之の行書作で書の歴史上最高傑作として今日に至ってもなおその地位は微動だにしない。ただ古今一の評価を受けたのは、彼が亡くなってから300年以上経ってからのことである。実は書の名手でもあった唐の第二代皇帝・太宗(599年～649年)が王羲之の書を絶賛し愛好したのである。そして王羲之のありとあらゆる書を集めたという。最高作品の「蘭亭序」は、王羲之から数えて7世の孫の智永からだますようにして入手した。それを太宗は自分の死に際し、自分の墓である昭陵に収めさせた。なお一説によると戦乱の際、盗掘され蘭亭序の所在は行方不明とも言われているので、ひょっとするとどこかで眠っているかもしれない。

ここで「蘭亭序」がどのような文章か前半部分を紹介したい。

最初は、〈永和九年歳在癸丑。暮春之初。會于會稽山陰之蘭亭。脩禊事也。〜〜〉で始まる。翻訳は、「永和九年(353年)癸丑の歳、三月初め、會稽山の蘭亭に集ったのは禊を行うためである」である。それから、「立派な人たちはすべて至り、老いも若きも皆集まった。さてこの地には、高い山険しい嶺、生い茂った林と長い竹とがあり、その上に綺麗な流れ(溪川)と早瀬とは、あたりに照り映えている。その水を引いて觴を流すための「曲水」を造り、一同周りに座った。管弦の華やかさこそないとはいえ、一杯の酒に一首の詩はまた秘められた感情をのびや

かに表すのに十分である。この日空は晴れ渡り、大気は澄み、春風がのびやかに流れている。広大な宇宙を仰ぎ見、万物の生命の素晴らしさを思いやった。そもそも人は互いにこの世の中で暮らしてゆくにもある者は胸の想いを取り出して、一室の中で語り合い、ある者は好むところに従って、肉体の外に自由にふるまう。～～」、以下人生観や心のうちが連綿と続く。日本語の訳文を見るとそれなりに理解はできるが、王羲之の心情がどの程度正確に訳されているのであろうか。

蘭亭には、もうひとつ大事なスポットがある。それは「御碑亭」という。高さ12.5メートルの八角形の建物で柱だけで支えられ壁はない。屋根はこうもり傘を逆さにしたような二層の構造で、とても強い印象を受ける。傘の骨の先端に当たるところは、尾がピンと立った鳥を思わせる。

建てたのは清朝第4代の康熙帝(1654年～1722年)である。この中に巨大な石碑が立っている。碑の前面は「蘭亭序」が刻まれている。実は康熙帝が1693年に蘭亭に行幸の折、この場所のあまりの美しさ感激し、その場で蘭亭序全文を書かれたという。それを碑に彫ったのだ。康熙帝も王羲之をこよなく愛した一人であったらしい。碑の裏面は孫にあたる第6代の乾隆帝(1711年～1799年)の詩が刻まれている。どちらも達筆であるが、満族が自分たちの文字を持ちながら、漢民族の文化を称揚するさまは何と表現すればいいのであろうか。

この碑の蘭亭序を声を出して読んでいる中国人も結構いるそうであるが、彼らはどのような点が素晴



御碑亭

らしいと思いつつ読んでいるのだろうか。彼らの琴線にどう響くのだろうかと考えつつ、ここを後にして出口の方に向かった。そこには何軒かの土産物店があったので、中に入ったのぞいてみた。すると高さ9センチ、直径6.5センチの黒い石の鉛筆立てが目にとまった。その円筒形の側面に蘭亭序324文字が彫りこんである。持つとずっしりと質感があり、さっそく買い求めた。この鉛筆立ては私の机の真ん中に置かれ、存在を誇示している。

最後に書聖といわれる王羲之の書風を紹介して、この稿を終わりとしたい。康有為の書の書風も全く理解できなかったが、王羲之もやはりよくわからない。

〈ひととき威勢がよく、龍が天門を跳ねるがごとく、虎が鳳闕^注に臥するが如し〉 (つづく)

注) 鳳闕とは漢代の宮城の門の名。門の上に銅製の鳳凰が飾り付けてあったのでいう。